

## わたしの戦争体験

福岡市城南区 猿渡 焜子

私は、現在の博多区で市民会館の近く奈良屋校区下鯛町に住んでおりました。家族構成は、父は赤紙が来まして出征中で、母と私13才（旧制女学校1年生）、あと9才、6才、3才の3人の弟と、生まれて3ヶ月の妹の6人で留守を守っておりました。毎日毎日、空襲警報のサイレンの音に悩まされながら、学校に行ったかと思えばすぐ家に帰るという日が続いておりました。

6月19日の夜、博多の空襲の日です。その日は空襲警報のサイレンの音と同時にものすごい音がして火の手が上りました。母は、「今夜の空襲はただごとではないような気がするので防空壕に入らないで、外に逃げよう」といつている時に家に直撃弾が落ちてきました。日頃食料品を入れた非常用袋（ザツノウと言っておりました。）を肩から掛けておりましたが、それを持出す間もなく、とにかく母と弟達と、妹はまだ首が座っていないので母がだっこしてその上を帯でしっかりとくくりつけ、私達の家は公道より奥の方にありましたので、とび出しました。ところがあたり一面火の海で、周囲は真黒なのにその火だけが、異常に赤くどこがどこか方角もわからない有様でした。こんな光景は、後でああ、あんなだったんだと思ったことでありまして、その時は無我夢中でした。ただ母と弟達と名前を呼びながら、はぐれないように手と手をつないで人、人、人、の中をかきわけながら須崎橋の方に逃げ、橋の下の川の中に入りました。幸いな事に川の水が引いておりましたので助かりました。怖い時には声も出ないし、涙も出ないと言うのは本当で、川の中には大勢の人がひしめきあっているのに子供の泣き声一つ聞こえません。皆じっと身をひそめて、飛行機の音がしなくなるのを息をひそめて待っておりました。女専（現在の女子大）が焼け落ちる時は、熱くて熱くてもう駄目かと思いました。空が少し明るくなり、川の水は満ちてくるし、今度は水でおぼれ死ぬのではないかと思い、一か八か道路に上りました。助かったと思う安心と空腹と疲労でくたくたでした。

悪夢のような一夜が明けました。母はとにかく自宅がどうなったのか行って見ようと言いまして、自宅の家の焼跡に行きました。まだくすぶっておりましたが、防空壕の中に穴を掘ってその中に水瓶を入れ、水瓶の中に食料品だとか、洋服、着物身の回りの物を入れておりましたので、それを取り出しているところに、伯母とおじいちゃんが歩いて和白から私達の事を気づがって、オニギリを持ってきて下さったので嬉しくて嬉しくて、あの時の嬉しさは今でも忘れることが出来ません。

それから私達は、和白の母の姉の所に身を寄せることになりましたが、空襲にあった時の恐さが忘れられなくて、夜になると恐ろしくて恐ろしくてたまりませんでしたので、父の実家のある山口県に屋根の無い貨物車に乗って行きました。関門トンネルを通る時は、屋根が無いので水のしずくがポタンポタンと落ちて来ましたが、私達は鯨詰めの貨物車の中で早くこの恐い

博多から離れたい一心でした。ところが山口県でも恐さは同じでした。配給の大豆をもらいに私と9才の弟が行った帰り道、機銃掃射にあい、命からがら帰りついたこともありました。蚊帳も蚊取線香もないので一夜中おきて蚊を取ったこともありました。

そうしている間に終戦となり、預金封鎖、平価切下げとなり、そろそろ内地におられた兵隊さんたちも帰って来てありましたので、母は父の安否も気になるし、また私達子供の学校のこともありますので、とにかく博多に帰ることにしました。博多に帰っても住む家もなしお金はありませんが、幸いなことに母の兄が西新町の祖原に焼け残っており、母の兄は出征していませんでしたが、伯母がとても気持ちの優しい人で私達を心から迎えて下さったので今でも感謝しております。

生まれて3ヵ月だった妹は、終戦直後で十分な医療設備もなく、満1才で死亡しました。可哀相なことをしました。母と伯母は食料の買出しに出かけますが、お金を持っていっても売ってもらえず、品物と品物との交換だったので、母は瓶のなかに埋めていて焼けなかった大切なたった一枚の銘仙の着物をお米と取替えて私達に食べさせ、自分は食べたふりをして子供達に少しでも食べさせようとしているのがわかるので、私達もだまってそれに甘えておりました。

そのうち、母の兄も復員して来ました。どんどん博多港に引揚船が入り、兵隊さん達が帰ってこられますが、私達の父は、待てど暮せど何の音沙汰もありませんでした。そのうち沖縄にて戦死との公報が入り、白木の箱にお位牌様だけ入れたものがお寺さんの供養があった後帰ってきました。母はその中に、父が出征する前に残していった髪の毛とつめを入れ納骨堂に納めております。

さあこれからが大変です。母は、女を捨てて男と同じになる覚悟をしたそうです。私達4人の子供をどうして育てて行こうか、お金も無ければ住む家も無い。全部灰になってしまったのですから、とにかく住む家からと思い、焼跡に市より戦災住宅を建ててもらいました。間取りは6畳、4畳半と汲取式トイレ、畳2枚ぐらいの土間が玄関兼台所です。お風呂は、ありませんので空ドラムかんを拾ってきて、水をバケツで汲み入れ、たきものがないので木レンガ（木でレンガの大きさに作りそれを敷つめてその上からコールタールを流してあるもの）、戦災で焼けているのでちょうどお風呂のたきぎとか、カマドの焚木によいので車力で拾いに行つて燃料にしました。お風呂は外です。その辺あたり一面焼野原ですので夜が更けて入ります。ドラムかんの風呂ですから、底が熱いのでゲタをはいて入ります。月夜の日はお月様の光に照らされ、雨の日傘をさして入り、冬は雪が降れば口をあけて、雪を口の中に入れながら、ああ戦争が終わったのだ、今までお風呂どころかトイレもおちおち出来ないありさまでしたので、何となく幸せな気がしました。母は焼跡にナスビ、キュウリ、トマト、豆、カボチャ等を植え、私達親子は肩を寄せあつてお互いに励ましあいながら生活してきました。現在母は85才、私64才、弟60才、56才、53才皆元気で母は孫・ひ孫達に囲まれて幸せに暮しております。今日私達は幸せに暮していけるのも、国の礎となられた数多くの方々、また国のために戦つて下さった数多くの人々のおかげだと感謝いたしております。